勇者サマが
堕ちる理由

～サキュバス様には
勝てないってことでいいですかぁ？～

体験版｜第1章・第2章

R-18／18歳未満閲覧不可

第1章 初敗北

回廊

王国歴三四二年。

王都の大聖堂を埋め尽くした民衆の歓声と、鳴り響く祝福の鐘の音は、今もレオンの耳の奥に焼き付いていた。

「魔王は俺が殺す――」

王国伝来の聖剣を腰に下げて、レオンはただ一人、魔王城へと足を踏み入れた。

ともに戦う仲間はいない。彼らは今、城を守る近衛どもとの交戦中だ。

正面から城を攻略するつもりはない。上級の魔物から聞き出した隠し通路を使い、一気に魔王の懐へ潜り込む――それがレオンの狙いだった。

レオンが勇者と呼ばれる所以は、目標を遂行し、敵の裏をかき、確実に敵を倒すその能力にある。

（単独での潜入……だが、俺ならやれる）

勇者の靴音が、隠された回廊に響く。その先に何が潜んでいるかも知らず、レオンは一人、奥へと進んでいった。

（魔王の間は、この回廊の先か……）

張り詰めた空気の中、靴音を忍ばせて進むレオンの鼻腔を、ふいに異質な香りがくすぐった。

立ち込める魔気の冷たさとはあまりに不釣り合いな、蜜のように濃厚で、脳の芯まで痺れさせるような甘ったるい匂い。

ふつり、と微かな性欲が腹の底から立ち上がるのを感じる。

男を狂わす魔物、サキュバスが近くにいる。

この距離でこれ。普通の男なら、もう立っていられまい。——だがレオンには魔性への耐性がある。並のサキュバスの魅了になら、抗える自信があった。

「——はぁ？ だ〜れかと思えば……ただの人間？ マジで？」

静寂を破る、鈴を転がすような、どこか小馬鹿にした女の声。

外套をつけていて、回廊も暗くて、よく姿が見えない。

だが、腰の聖剣に目を留めたのか、その気配がわずかに揺れた。

「聖剣？ じゃあ勇者！？ って魔王城の前で戦ってんじゃないの？」

返事はしない。過去に尊敬していた戦士でさえ、干からびるまで搾り殺されたことを思い出す。油断はしない。

レオンは鋭く息を吸い込み、聖剣を一気に抜き放ち、その言葉に付き合わずに一刀で斬り伏せようとする。

「きゃあ！」

一閃。外套が縦に割れて、はらりと落ちる。

あらわになったのは、闇に沈む回廊にはあまりに場違いな、白い肌。

プラチナブロンドのツインテールが、裂けた布の間からふわりと揺れる。

大きな瞳は赤く、整った顔立ちは、愛玩人形のような造形で、完璧だった。

——いや、それより目がいってしまうのは。

布地が悲鳴を上げているのではないかと思えるほど、暴力的な質量を誇る二つのたわわが、裂けた外套からはみ出すように露出している。

男をその気にさせるためだけに肉付けされたような、いやらしいほど滑らかな曲線を描く体だった。

外套が落ちた途端、むせかえるようなメスの匂いが溢れ出す。どうやら外套は魔術で彼女のフェロモンを抑制していたもののようだった。

レオンは青ざめる。

遠くにいたときでさえ、外套越しに色香が漂っていたのだ。これでは瓶に詰められていた香水の栓を抜いたようなものだ。

レオンの予想よりも遥かに強力なサキュバスだった。

遠距離。

魔法攻撃。

五感を遮断してからの近接戦闘。

様々な戦術が脳裏を巡るが、まとまらない。

まずい。サキュバスの体。あの胸。見ているだけで、初恋めいた胸の高鳴りが急激に湧き上がる。

レオンはすべてを振り払うべく、剣を切り下ろす。

だがその刃は、サキュバスを捉える直前、ふっと速度を失い、力なく、止まった。

視線は彼女の瞳に釘付けにされていた。

「魔王城の人たちも勝手に欲情しちゃうから、普段は外套でフェロモン抑えてるんだけどさぁ。それで助かった感じ？ ラッキー♪」

レオンは生唾を飲む。

声が脳に響く。

力なく聖剣がとまった理由を理解しているのか、サキュバスはその刃先を前にしても、怯えるどころか薄笑いを浮かべたまま、一歩ずつ距離を詰めてきた。

「こんにちは勇者サマ、アタシはルル。勇者サマのお名前は？」

「……レオンだ」

近づいてくるルルから、目が離せない。むっちりとしたふとももも。黒い光沢のある生地からはみ出す胸。

既に魅了が効いている。打開策を探そうと、レオンは会話をつなぐため名乗る。

そうでもしなければ、性欲を煽る塊を前に、ズボンを下ろして硬くなりかけの棒をしごき上げ、今すぐ精を放ちたくなる——それを、なんとか抑えるためだけに。

「ふぅん、これが聖剣かぁ。カチカチに硬くてカッコイイけどさ……ねえ、勇者サマ？」

「止まれ！ それ以上近づけば——」

「そんなこと言って、くぎ付けじゃん。ほら、おっぱいも見よっか、ウケる」



ルルはわざとらしく両腕で自身の豊満な胸を押し上げ、深い谷間をレオンの目の前に突き出した。

むせ返るような甘い香りと、布地を押し広げてこぼれ落ちそうな肉感の塊が、至近距離で視界を埋め尽くす。

（くそ、思考が……っ！ 目が勝手にあの胸に――うあ、なんて……！）

退魔の修行で培ったはずの精神集中が、あっけなく乱れる。

「見るな」と脳が警告を発しているのに、視線がどうしても、その深く長い影を落とす谷間から剥がせない。喉がカラカラに渇き、握りしめた聖剣の柄にじっとりと脂汗が滲む。

陥落

落ち着こうと深呼吸する。それが失敗だった。

サキュバスの剥き出しのフェロモンを吸い込んだ瞬間、股間が硬く張り詰め、痛いほどに跳ね上がる。理性は一瞬で焼き切れ、聖剣が手から滑り落ちた。

カラン、と乾いた音が響く。聖剣を離したその手は、勝手に股間へ伸びようとする。それを反対の手で必死に抑え込み、正気を繋ぎ止めるために、奥歯で自分の舌を噛み締めた。口の端から血が垂れる。

「苦しそう〜。そんなに震えて、剣も落としちゃって。ねえ、正直になったら？」

一歩詰め寄られるたびに、後退を余儀なくされる。背中に冷たい石壁の感触が当たった瞬間、レオンは自分が完全に追い詰められたことを悟った。

「運が悪かったね〜。噂どおり、戦術家と名高い勇者様に対策バッチリで挑まれたら、普通に負けてたかもね。なのに、こんな裏道から来ちゃうんだもん。もう詰みじゃんね？」

「俺は、お前なんかに屈しない……」

「はいはい、そんじゃ、触りたいよね？ 抵抗しないなら、ふわふわのおっぱいまでぇ、おててを案内してあげる」

ルルがレオンの手を取る。こぼれ落ちんばかりの乳房へ、ゆっくりと導いていく。



触れる、その一瞬だけの猶予の中で、レオンは言い訳を紡ぎ続ける。ふれるだけだ。確かめるだけだ。勇者として、敵の体質を調べる必要がある。——そう自分に言い聞かせるたび、ルルの唇が嘲るように歪むのを、ぼんやりと感じていた。

指先が、乳房に触れる。

ふに、と沈み込むありえない柔らかさ。指先だけなのに、全身を包まれたような錯覚。その錯覚が刺激となり、ズボンの中で精が溢れ

る。ビュッ、ビュクッ、と勢いよく打ち付けられ、下着の中で粘り気のある塊がぐちゃぐちゃと広がる。たった指先だけで、抗う間もなく弾けていた。

「うう、あああああ！！！」

「くんくん……ぷっ、あはは！ イッた～？ 触っただけで～？ 勇者様が～？ ちょーウケるんだけど、かわいいんだけどぉ♡」

言い返す余裕もない。止まらない射精感に腰が抜け、レオンはその場に膝をついた。

それを見下ろしながら、ルルは上体をのけぞらせ、見せつけるように自らの手で、これでもかと胸をむにゅむにゅと揉みしだく。

肉棒が一瞬で硬さを取り戻す。

「ほらぁ、どうしたの～？ そんなに欲しそうにじーっと見つめちゃって。悔しい？ だったら我慢しなくていいんだよ？」

ルルがレオンの眼前で胸を揺らす。勇者の理性など関係ない。気づいたときには、ズボンを脱ぎ捨て、レオンは必死に自分のペニスをしごき上げていた。

獣のように唸りながら自分のモノをしごくレオンに、ご褒美とばかりにルルがその顔におっぱいを押しつける。乳肉の壁が口と鼻を塞ぐ。喘ごうとするほど、サキュバスの甘い香りが肺を満たし、暗闇の中でレオンの呼吸が細く、途切れていく。

「あ、きもち……っ、いい、もっと……っ、おっぱい、もっと……っ！」

「情けなぁい♡ 決めた、勇者サマ、アタシのおっぱい奴隷にしてあげる♡」

ルルの口から放たれた屈辱的な宣告のはずなのに、レオンの奥底で何かが跳ねた。

（奴隷……おっぱい奴隷……！）

脳裏を、祖国の民の歓声が、国王の厳かな声が、血の滲む鍛錬の日々が、走馬灯のように駆け巡る。自分は世界を救う勇者だ。邪悪を討つ聖剣だ。サキュバスに屈するなど、死んでも許されるはずがない。

だが、目の前でルルが胸をよじるたび、甘い香りが脳を溶かし、勇者の誇りも義務も色褪せていく。

（嫌だ……失いたくない、俺は……勇者――）

「余計なことは考えない！ ほら、おっぱいで頭おかしくなれ！ ざぁこ♡ ち○こカチカチでカッコつけるな♡」

ルルがレオンの顔を乳房で挟んで、ぱふん、と叩く。そのふわふわの打撃が、レオンのわずかな反抗の火を吹き消した。

「あはっ、おっぱいで気持ちいいくせに！ ざぁこ♡ おっぱいマゾ♡」

「マゾ」の二文字が、脳を直接撫でる。屈辱のはずのその言葉が、体の芯を痺れさせる。

レオンは震えながら自らのものをしごき立てる。

「は、ぁ……っ、イく……イくッ」

「そう、それでいいの♡ ほーら、たっぷりイッて、アタシのおっぱい奴隷なれ！ イっちゃえ、勇者サマ♡」

「っ、ア、アアア……ッ！」

びゅ、びゅ、びゅー！ と勢いよく精が放たれ、これまで感じたことのない快感に意識が薄れていく。

矜持も理性も関係ない。

レオンはなす術もなく失神して、その意識は闇へ沈むのだった。

第2章 飼育生活

目覚め

肌を撫でるシルクのシーツは、安宿で使ったゴワゴワとした麻のものとは、比べ物にならないほど柔らかく滑らかだった。

差し込む朝日の暖かさに微睡（まどろ）みながら、レオンはゆっくりと瞼を持ち上げる。

（ここは……どこだ？）

漂うのは、昨夜、回廊で自分の理性を根こそぎ奪い去ったあの甘ったるい香り。

ピンクと黒を基調とした、いかにも少女趣味な天蓋付きのベッドの上で寝かされていたことに気づき、レオンは跳ね起きようとした。だが、体中が鉛のように重い。

「あ、起きた？ おーい、役立たずの勇者サマ〜！」

扉が乱暴に開け放たれ、聞き覚えのある生意気な声が響く。

入ってきたのはルルだった。昨夜の扇情的な姿とは打って変わり、フリルのついたエプロンを身につけ、手には湯気の立つトレイを持っている。

「お前……！ 俺をどうするつもりだ！ 聖剣はどこへやった！」

「はぁ？ なに寝ぼけたこと言ってんの。聖剣なら、あそこの傘立てに突っ込んだけど？」

ルルが顎で示した部屋の隅には、伝説の聖剣が、まるでただの頑丈な鉄の棒のように無造作に突き立てられていた。

「くそっ……！」

レオンはベッドから這い出ようとしたが、頭を強烈な自己嫌悪が支配した。

昨夜の記憶。ルルの豊満な胸に狂わされ、一心不乱に自慰行為に励んでいた自分の姿が、フラッシュバックする。おっぱい奴隷にしてあげる——あの女はそう言った。そして自分は、それに抗わなかった。神聖な誓いを破り、魔王軍の女に魂を売ったのだ。

（このままではダメだ……！）

一刻も早くここを脱出し、再起を図らねばならない。レオンは昨日の屈辱から頭を切り替え、どうやってここを出るかに注力することに決めた。

そしてベッドから足を踏み出す。

しかし、衰弱は想像以上だった。力が入らず、そのまま床に倒れる。

「動いちゃダメでしょ、まだ体からアタシのフェロモンが抜けてないんだからさ。ほら、朝ごはん作ってあげたから、おとなしく食べなよ」

トレイがベッドサイドのテーブルに置かれる。

そこにあったのは、こんがりと焼けたトーストに、具沢山の温かい野菜スープ、そして新鮮な果物だった。

「だ、誰が魔物の作った飯など……っ！」

「お腹、グーグー鳴ってんの丸聞こえなんですけど？ 勇者様ってば、プライドだけは無駄に高くてウケるー。ほーら、スプーン持ってあげるから、あーんして？」

ルルはベッドの端に腰掛け、スープをすくってレオンの口元に突き出す。

「な、なめるな……っ！」

レオンはルルの手を拒絶するように払いのけようとした。

しかし近づいただけで、彼女の体温と、あの甘い香りが鼻腔をくすぐる。エプロンの胸元からは、昨夜レオンを破滅に導いた凶悪な双丘が、はち切れんばかりに自己主張していた。

視線が吸い寄せられるようにそこへ釘付けになっている自分に気づき、レオンは慌てて顔を背けた。だが、すでにその醜態はルルに見透かされている。

「ふふっ、相変わらず正直な目だね、勇者サマ？」

ルルはクスクスと愛おしそうに声を弾ませ、レオンの赤らんだ顔を覗き込んだ。

「うっ……！」

「アタシじゃなかったら、レオンは昨日のうちにビュービュー精液吐き出すだけの噴水になって、干からびたミイラになって、魔王城のゴミ捨て場に転がってたんだよ」

「なんで、助けたんだ？」

ルルはふっと笑みを引っ込め、一瞬だけ素の声で「……だって、見捨てられなかったじゃん」と漏らした。はっとして、慌てて生意気な笑みを作り直す。

「可愛いからだよ、だってザコザコで、おっぱいに甘える勇者って、すごくゾクゾクするじゃん」

生意気なメスガキの笑みが、レオンを見下ろしている。

「ふふ、おいしい？ よかったねぇ、まともなご飯食べさせてもらえてさ。しっかり食べなよ、アタシの可愛いオモチャなんだから」

頭をくしゃくしゃと撫でられ、レオンは耳まで真っ赤にしながらスープを飲み干す。

レオンは油断なく部屋を見渡し、脱出の糸口を探る。幸い、聖剣はそう遠くない場所に立てかけられたままだ。

くちうつし

「ほら、あーん」

ルルがいたずらっぽく微笑みながら、木製の器からスープを自身の唇に含んだ。

そのまま顔を近づけてくる。彼女の吐息に混じる甘い香りと、温かいスープの匂いが混ざり合い、レオンの脳を激しく揺さぶった。

（抗わなければ……！）

レオンのすぐ傍らには、かつて数多の魔を切り伏せた聖剣が立てかけられている。今すぐその柄を掴み、この淫らな魔族を斬り払うべきだ。それが世界を救う勇者としての、あるべき姿のはずだった。

しかし、伸ばそうとした手の先、すぐ目の前で、ルルのエプロンの胸元がはち切れんばかりに膨らんでいる。至近距離で呼吸に合わせて上下するその豊かすぎる膨らみに、レオンの視線は吸い寄せられるように釘付けになってしまう。

（これは、彼女が強引に迫ってくるからだ。俺は弱ってて、彼女のフェロモンでまともに動けないから、だから、自分の意志ではない。仕方がないんだ……）

心の中で必死に言い訳を並べ立てる。だが、聖剣へ伸ばそうとしていた指先からは完全に力が抜ける。

そしてレオンの唇が、ルルの柔らかく濡れた唇に塞がれた。

口内に流れ込んでくる温かいスープと、ルルの甘い舌の感触。抗うことなどとうに忘れ、レオンは夢中でその熱を吸い上げ、ゴクリと喉を鳴らして飲み干してしまう。

飲み干してもなお、唇は離れなかった。ルルの舌先が、確かめるように歯列をなぞる。逃げようとしたレオンの舌は、あっけなく搦め捕られた。絡められ、吸われ、口の奥まで暴かれていく。スープの甘さと彼女の唾液の甘さの境目が、すぐに分からなくなった。

鼻から抜ける息が、自分のものとは思えないほど熱い。ルルは楽しむようにゆっくりと角度を変え、レオンが息を継ごうとするたび、そのわずかな隙間さえ塞いでいく。

たっぷりと味わい尽くしてから、彼女はようやく唇を離した。

「ほら……美味しかったっしょ？」

「おい……うう……」

危うく美味しいと言ってしまいそうになった自分に愕然とする。

魔族に口移しで飲まされて、恥じるべきだったのに。胸を占めているのは、まるで別の熱だ。剣の修行に明け暮れた十数年、女に触れる機会などありはしなかった。——今のが、生まれて初めての接吻だった。

レオンはか細く、それでいて絞り出すような声を漏らした。しかし、ルルはわざとらしく耳に手を当てて首を傾げてみせる。

「えー、聞こえない。もっと大きな声で、ちゃんと言わなきゃあげないよ」

「っ……！」

レオンは屈辱に歯を噛み締めた。王国を救うべき勇者が、魔族の奴隷のような扱いに甘んじているという現実が頭をよぎる。

「くっ……っ！」

目の前の誘惑と飢えには勝てない。王国を救うべき勇者の誇りも、聖剣を振るった栄光も、いまや目の前で揺れる豊満なおっぱいと、甘く熱い誘惑の前に、掻き消えそうだった。

本当は突っぱねるつもりだった。だが、蕩けた口からこぼれ落ちたのは、まるで別人のような甘い声だった。

「……美味しい、スープが美味しいです……っ！ ルルの口移しスープも、その柔らかい唇も……もっと、もっとください……っ！」

それを聞いたルルは、ふっと笑みを消し、無表情のままじっとレオンを見る。

わずかな沈黙のあと、ルルはふたたび勝ち誇ったようにクスクスと意地悪い笑声を響かせ、愛おしそうにレオンの頬を撫でた。

「――はっ？」

ふと、自分の口から零れ出たあまりにも赤裸々な言葉に、レオンはハッと正気を取り戻した。

だが、すでに遅い。羞恥に喉が引きつり、顔から火が出そうになる。

「ふふっ、やっと気づいたぁ？」

答えを待たず、ルルはふたたび器を傾けてスープを口に含んだ。そのままレオンの顎を掴み、上向かせる。

二度目は、抵抗の素振りすらなかった。開いた唇の隙間へ、温かい甘さがとろりと注ぎ込まれる。飲み下すより先に舌が入ってきて、口の中をかき回された。飲む。飲みながら、吸う。どちらが食事でどちらが接吻なのか、もう考えられなかった。

つー、と、唾液が淫らな糸を引いて、レオンの唇からルルの柔らかい唇が離れる。名残惜しさもあったが、それ以上に、いま自分が口走った言葉が頭を駆け巡り、心臓がバクバクと狂ったように暴れ回った。

「な、なんだこれ……俺は、いったい何を……っ！？」

自分の意思とは裏腹に、体が火照り、頭の中がとろけるように甘く痺れている。

混乱するレオンを眺めながら、ルルはクスクスと愉しげに喉を鳴らした。

媚薬

「ねえ、教えてあげよっか？ そのスープね、好きで好きでたまらない相手にはすごく正直になっちゃう媚薬なの。だから、今のドスケベなお願いも、ぜーんぶレオンの本当の気持ちってわけ。隠さなくていいんだよぉ？」

「う、嘘だ……！ それじゃ俺がお前を――っ！」

「ふふ、そうなんじゃん？」

ルルはふふっと意地悪く笑い、身にまとっていたエプロンも上着も綺麗に脱ぎ捨てた。

あらわになった瑞々しくたわわな乳房に——彼女はゆっくりと器を傾けた。

琥珀色の液体が、いやらしい乳肉に弾かれ、艶めかしい谷間を、トクトクと伝っていく。

「ほら、どうする？ 変態おっぱいマゾ勇者さまぁ？」

——だめだ。見るな。俺は勇者だ。魔王討伐の旅の途中で、食事を乳房から……など言語道断だ。

レオンは視線を逸らそうとした。逸らせるはずだった。だが眼球はまるで意志を持たないかのように、谷間を彩る琥珀色の輝きに釘付けになったまま動かない。喉の奥で、欲望の鳴き声が小さく漏れる。



「あれぇ？ 逃げなくていいんですかぁ？ 覗いていいのは、後三秒までですよ♪」

「くっ……！」

「三、二、一……おしまい、時間切れ♪」

カウントとともに首を振り払えばよかった。なのに、その三秒間、レオンはただ淫靡な光景を目に焼き付けていた。——見てしまった。

「おねだりしてぇ、おっぱいスープをぉ、ちゅぱちゅぱ吸わせてもらっちゃう♡？ ……それとも、おっぱいふきふきして、もうおしまいにしちゃう？」

「ま、待ってくれ……！」

口から飛び出したのは懇願だった。自分でも驚くほど情けない、震えた声。ルルは器を傾けたまま、意地悪く小首をかしげる。

「えー？ なにが〜？ 言葉にしてくれないと、わかんなーい♡」

——言うな。言えば終わりだ。言った瞬間、俺は……。

脳内で警鐘が鳴り響く。けれど、濡れた瞳は既に乳房の先で揺らめく滴を追いかけていて、喉は干上がり、拳は無意識に床を叩いていた。理性の防衛ラインは、もう一本残っていなかった。

レオンはあふれるヨダレと涙を拭うことも忘れ、おっぱいから離せない視線のまま、床に這いつくばって情けなくすがった。

「お、お願いします……っ！ 器からなどではもう我慢できません……っ！ ルル様のおっぱいから直接、そのスープを飲ませてください……っ！ どうか、この卑しい私に慈悲を……っ！！」

「なーんだ、言えばちゃんと素直になるじゃん。はーい、よくできましたぁ、勇者さまぁ♡」

ルルの許可がおりる。目の前の白い膨らみは砂漠の只中に突如現れた泉のように見え、体が動いた。

「はい、どーぞ♡」

レオンはルルの胸元へ顔を埋め、熱い液体と柔らかい肌を一度に求めた。

「んっ――ぁっ、ふふふ」

ルルが甘い息を漏らす。スープが鎖骨から谷間へ伝い、つややかな肌の上で細く光る。レオンはそれを逃すまいと舌を這わせ、犬のようにスープを舐め取っていく。

熱い。甘い。柔らかい。乳首の際までスープがかかり、彼はそこまで丁寧に、しかし貪欲に舌を転がす。吸いつけば、胸は掌から溢れるように形を変え、ルルの吐息が乱れた。

「ははっ……みっともない顔してるよ、勇者サマ」

嘲る言葉とは裏腹に、ルルは胸を突き出すようにして、レオンが舐め取りやすいようにしてくれる。だからレオンは喉の奥で低い声を漏らして、スープの残りと乳の感触を交互に味わった。

「残したらもったいないよ」

ルルは自分の乳房にしゃぶりつくレオンを見下ろしながら、彼女の腹部まで垂れているスープの雫を指で拭い、自分の唇へと運び、長い舌をくねらせて、見せつけるように舐めとった。

「美味しー。そう思うよね、勇者サマ？」

なんて淫靡で、神々しい姿なのか、とレオンは思う。震えながら、しかし自分はルルの胸を貪るのに夢中で、ぐちゃぐちゃになりながら、感想を口にする。

「お、おっぱいスープ、美味しいです……っ！ ああ、こんなの……っ！」

レオンは、自分の口から飛び出したあまりに淫らな言葉に絶句した。全身の血液が一気に沸騰するような恥ずかしさが脳天を突き抜ける。

（な、なんだこれ……！？ 俺はこんな言葉……！ ち、違う、これはルルが混ぜた媚薬のせいだ……！ 飲まされた薬が理性をおかしくしているだけで、意識も体も勝手に……っ！）

必死に心の中で言い訳を重ねながらも、レオンは目の前で微笑むルルの柔肌に抗うことができず、ただ甘い幸福感に溺れていく。

「ごくごく飲んでぇ、おっぱいをめちゃくちゃに味わってぇ……ほんとにえらいねぇ」

ルルは小首をかしげ、いたずらっ子のような残忍な笑みを浮かべた。その声には、子供をあやすような声音の裏に、底知れぬ嘲りが隠されている。

「うっ……くぅ、ぁむっ……ぷはぁ……っ！」

屈辱に身体を震わせながらも、レオンはルルの柔らかくむっちりしたスライムみたいなそれに顔をうずめ、滴るスープごと肌を貪るようにしゃぶりつくし、言われるがままに飲み干すしかなかった。

「ねえ、知ってる？ 世間の人たちはみんな、『聖剣の勇者さまはすごく強くて、最高にかっこいい英雄なんだ』って噂してたよ？ ……ふふっ、本当にかっこいいね、今のその顔。誇り高き英雄さまが、サキュバスのおっぱいにしゃぶりついて、よだれを垂らしてるんだもん。最高に滑稽で、ぞくぞくしちゃう♡」

浴びせられるあざけりの言葉も、身体の熱も、すべては飲まされた媚薬のせいなのだと——レオンは必死にそう思い込もうとした。

「ルル様、ルル様……っ！ おっぱいスープ、美味しいです……美味しいよぉ……っ！」

「あはは、ウケるー。ほんと、最高の変態勇者だねぇ♡」

しかし、その言い訳を盾にするたびに、羞恥心も抵抗の心もみるみる溶けて消えていくことに、彼はもう気づけなくなっていた。

幾度の朝

それから幾度、この部屋に朝日が差し込んだのか、レオンはもう数える気をなくしていた。

食事は必ずルルの手から与えられ、そのたびに彼の唇は勝手に甘えた言葉を吐いた。何度目かの夜、彼はふと、恐ろしいことに思い当たる。

（……本当に、薬のせいだったのか？）

媚薬が混ぜられていたのは間違いない。だが、昼は。夜は。彼女がただの水を差し出したときでさえ、自分は服従するかのように、ルルに甘えて縋りついてはいなかったか。

どこまでが薬で、どこからが自分なのか。その境目を探ろうとするたび、足場ごと崩れ落ちていく感覚があった。抗うには、まず何に抗うのかを知らねばならない。だが、抗おうとしているその意志さえ、本当に自分のものだと言い切れない。

（俺は……まだ、勇者なのか？）

考えるほどに疲れ、疲れるほどに、傍らのやわらかな温もりへ沈み込みたくなる。

やがてレオンは、たったひとつの結論に縋りついた。

（薬だ。すべては薬のせいだ。……薬さえ抜ければ、俺は戻れる）

その言い訳は、彼に残された最後の砦だった。

体験版はここまでです

第1章・第2章を収録しています。
本編は全5章構成です。
第5章にエピローグを収録しています。

本文の転載・再配布はご遠慮ください。